

AKB48の躁, 初音ミクの鬱 : コミュ力至上主義の光と影

著者	土井 隆義
雑誌名	社会学ジャーナル
号	39
ページ	1-22
発行年	2014-03-31
その他のタイトル	AKB48's manic state, Hatsune Miku's Depressed state : The light and shadow of over-communicative society
URL	http://hdl.handle.net/2241/00124099

A K B48の躁，初音ミクの鬱

～コミュカ至上主義の光と影～

土 井 隆 義

抄録

人気アイドルグループAKB48の総選挙は、次期発売の曲を歌唱する選抜メンバーをファンが人気投票で選ぶイベントである。プロデュースする側が決定するのではなく、享受する側が決定するこのシステムは、今日の日本社会の、とりわけ若者たちに見られる価値観の多様化を象徴している。プロフェッショナルの決定に対して、一般の人びとが納得できなくなったことを示すものだからである。

このような価値観の多様化は、既成の社会制度の拘束力を弱め、人びとの人間関係をかつてよりフラットで自由度の高いものへ変えていった。しかしその一方で、そのリスク化と格差化を推し進めてもきた。その結果、人間関係に対する満足度が上昇する一方で、その不安感も増してきている。そのアンビバレントな傾向がとりわけ2000年頃から顕在化したのは、わが国に新自由主義が定着し、社会の流動性が高まったのがこの時期だからである。

初音ミクを代表格とするボーカロイドのファンたちは、このような人間関係の不安定感に由来する「生きづらさ」を様々な作品として仕上げ、「ニコニコ動画」や「ユーチューブ」などインターネットの動画サイトにアップしている。一般の人びとが、とりわけ若者たちが、自らの思いを作品として世の中に広く訴える手段を得たことの意味は大きい。ここでは、作品の創作側とその受容側がたんに近い関係になっただけでなく、相互に入れ替わる現象すらも見受けられ、AKB以上に関係のフラットが進行している様子をうかがい知ることができる。

このように価値観が多様化し、人間関係のフラット化が進行していくなかで、しかし唯一、特権的な地位を保っている属性がある。いわゆるコミュカ（コミュニケーション能力）である。あらゆる価値項目が横並びになっていくなかで、コミュカだけはただ1つプライオリティを有する資質となっている。規制緩和が進み、自由市場化した人間関係において、いわば通貨の役割を果たすようになっていくからである。それはAKBで人気を博するアイドルの活躍を通してもうかがい知ることができるだろう。

しかしコミュカとは、じつは個人に内在する資質などではなく、関係のあり方によって規定されるものである。したがって、個人的な努力によって培っていく

ことは難しい。ここにコミュカの物象化がもたらす陥穽がある。このような困難を克服するため、今日では人物イメージをシンボル化したキャラによるコミュニケーションが多く営まれるようになってきている。このようなコミュニケーション・スタイルはネットの世界との相性も良く、とりわけ若者たちの間で広がっている。

キャラによってシンボル化されたコミュニケーションは、人間関係の自由市場において確かに効率が良い。相互の見通しがよくなり、関係を円滑に進めることができる。しかし、それは同時に第三者との入れ替え可能性が増すことでもあるから、そこに代替不安を引き起こさざるをえない。その不安は、とりわけネット空間において強烈なものとなる。ボーカロイド曲にはこのような代替不安を歌ったものも多いが、そこでの言葉の紡がれ方それ自体にも、この代替可能性の広がりという今日の特徴を読み取ることができる。

価値観の多元化とフラット化が進行する現代の日本社会において、絶対的な拠り所を失った人びとの自己承認欲求はかつて以上に高まっている。コミュカ至上主義の蔓延はその帰結の1つともいえるだろう。AKBを代表格とするアイドルグループの人气がその光の面を照射しているとすれば、初音ミクを代表格とするボーカロイドの人气はその影の面を照射しているのである。

1. AKB48の人气が物語るもの

●多元化する価値意識

AKB48は、今日の芸能界において押しも押されぬ最強の人气アイドルグループだろう。毎年6月に行なわれるファンたちの総選挙は、いまや初夏の風物詩となった観すらある。この選挙では、単なる人气投票とは違い、その獲得票数で、次回CDの選抜メンバーが決まる。AKBの面々にとっては、まさにアイドル生命をかけた真剣勝負である。

もっとも、AKBが結成されてからしばらくの間は、その総合プロデューサーである秋元康が、自らの眼力で選抜メンバーのすべてを決めていた。ところが、その決定に対して、やがてファンたちからクレームがつくようになる。秋元による選抜の方針に納得できなくなったのである。しかし、そこはさすが名プロデューサーというべきだろう。ファンからの批判の合唱に逆に商機を感じとり、それを総選挙というビジネスにしてしまった。

このイベントの大ヒットが物語っているのは、今日のファンたちに見られる趣味趣向の多様化である。秋元のような名プロデューサーといえども、とうてい掌握しきれないほど、彼らの好みは多種多様になっている。そして、その背景にあるのは、今日の若者たちの価値観の多様化である。NHK放送文化研究所の調査によれば、1970年代以降、日本人の意識は「伝統志向」から「伝統離脱」へと大きく変容してきた。その傾向は若年層ほど目立っている。

昨年6月のAKB総選挙で第1位を獲得したのは、「さしこ」こと指原莉乃だ

った。彼女のトップ当選はマスメディアでも驚きをもって迎えられ、2位になった大島優子からは「涙の1つも出ない。こんなお腹を抱えて笑っちゃう総選挙は初めて」と皮肉混じりのコメントが出るほどだった。

AKBの売りは、フツの女の子が真剣に頑張っている姿を見せることにある。他のメンバーほど容姿端麗とはいえない指原は、フツの女の子という点で、たしかにAKBのコンセプトにぴったりのタレントだろう。しかし、これまで出演したTV番組では、メンバーに負わされた課題を1人だけ達成できずに途中リタイアしたり、「自分はモテない」「かわいくない」などと泣き言ばかりで、真剣に頑張っている姿を見せるという点では「？」がつくタレントでもあった。

しかも彼女は、一昨年にはファンの男性との交際の様子がその男性自身による暴露で発覚し、姉妹グループのHKTへと移籍させられ、さらに元カレとの二股交際も発覚するなど、いわばスキャンダル続きのタレントだった。そんな彼女が第1位に選ばれたのだから、当然ながら関係者の間では大騒動だった。従来のアイドルのイメージが完全に覆されたからである。

指原は、周囲からヘタレといじられることで人気を高め、またBL好きの腐女子や熱狂的なハロヲタの面も見せるなど、正統派アイドルの路線でいく他のメンバーとは異なった色物として売り出してきた。そんな彼女のトップ当選は、近年の国政選挙で指摘されるような第三極化が、AKB総選挙でも見られることを示している。まさに今日の価値観の多様化を反映した現象だったのである。

●人間関係のフラット化

このような若者たちの価値観の多様化は、日常生活における彼らの人間関係も変容させてきた。旧来の制度や規範へのこだわりを弱め、それに縛られない自由な意識を持つようになった結果、人間関係のフラット化と自由化が進んできたのである。AKBのファンたちが、名プロデューサーの決定に納得できず、大ブーイングを繰り広げたのも、そのフラット化を象徴した出来事だったといえる。

当然ながら、AKBのファンたちは、アイドルとの関係もフラットだと感じている。だから、彼らはアイドルを「追っかける」とは表現せず、「押す」と表現するのである。憧れの存在の後ろを追いかけていくのではなく、むしろお気に入りのタレントを自分たちの票の力で人気者にしてやるといった感覚なのだろう。そして、タレントの側もまた今日の若者の一人である以上、ファンと等しくその感覚を共有している。

かつてのタレントは、よほどの人気者でもない限りアイドルとは自称しなかった。アイドルとはファンたちに仰ぎ見られるものと思っていたからである。しかし今日では、まだ駆け出しのタレントでも、臆することなくアイドルをやっていると自称する。この「やっている」が示すように、ファンとの関係はフラットな役割分担にすぎないと感じているのである。

このような言葉遣いの変化にも見てとれるように、若者たちの人間関係ではか

つてのタテの要素が薄まり、相対的にヨコの要素が増している。それは学校内における人間関係においても同様で、たとえば教師と生徒の関係も、今日ではフラット化してきている。もちろん、彼らといえどもお互いの役割分担はわきまえているから、建前では教師を立ててはくれるだろう。しかし内心では、人間として基本的に対等だと感じている。教師は学校的な価値観の体现者であるが、それは数多くある価値観の一つにすぎないことを強く実感しているからである。

また、教師と生徒との関係のフラット化は、世代間ギャップの縮小という点から捉えることもできる。両者の意識のギャップが縮小してきたのは、我が国が成熟社会に入ったからである。第二次大戦後の我が国は、高度成長の時代から安定成長の時代へと、そして低成長の時代へと、その歩む速度を段階的に落としてきた。そのため、それぞれの時代で旧世代と新世代の人びとが生きる社会段階の落差は大きく異なっている。高度成長期の社会では両者のあいだに大きなギャップがあるのに対し、低成長期の社会ではほとんどギャップがない。

考えてみれば当然のことだが、成長の著しい社会では世代間のギャップも大きくなり、その緩やかな社会では世代間のギャップも小さくなる。今日、大人と若者の世代間ギャップが縮小しているのは、社会成長の鈍化に由来する側面も大きいのである。そして、その意識ギャップの縮小は、価値観の多元化と相まって、かつてのような激しい世代間の対立を終結させ、その現われの一つだった組織的な校内暴力も激減させてきた。

●満足感と不安感の併存

このような人間関係のフラット化は、友人に対する若者たちの態度にも大きな影響を与えてきた。わが国の18歳から24歳の若者を対象として、1970年代初頭に第1回調査が行なわれて以来、5年間隔で継続調査が行なわれている「世界青年意識調査」の結果によれば、70年代以降、友人関係に対する日本の若者の満足度は右肩上がりで高まっている。「友人や仲間といるときに充実感を覚える」と回答した若者は、70年代初頭には約50%だったが、2000年代に入ると約75%まで増えているのである。

私たちは、価値観が多様化するつれて、旧来の制度や規範へのこだわりを弱め、それらに縛られない自由な人間関係を持つようになった。その結果、地縁や血縁などの伝統的な共同体も、学校や職場のような社会的な団体も、かつて有していた強い拘束力を徐々に弱めていった。また、友人関係のような自発的に作り上げられる集団も、その自由度を徐々に高めていった。

かつては、たとえば同じ地域の住民だから、同じ親族の一員だから、同じ会社の社員だからといったように、社会的な枠組みに同じく属することが、人間関係を支える強力な基盤となっていた。換言すれば、その多くが社会的な制度に強く縛られていた。若者たちの友人関係においても同様で、たとえば同じ学校や同じクラスの生徒になった以上は仲間でなければならないとか、同じ部活のメン

バーである以上は助けあわねばならないとか、そういった規範的な圧力が少なからず存在していた。

もちろん現在でも、若者たちが友人を作る最初のきっかけは大して違ってないだろう。しかし、その後の関係を維持していく上で、制度が果たす役割は大幅に小さくなっている。同じクラスの生徒だからといって、自分と気の合わない相手と無理して付きあう必要などないし、同じ部活の一員だからといって、無理に助けあう必要もない。制度的な枠組みの拘束力が弱まるなかで、そう考える若者たちは増えている。不本意な相手との関係に縛られることが減ってきたのだから、その分、充実感が増してくるのも当然のことだろう。

この「世界青年意識調査」では、「友人や仲間のことが悩みや心配」と感じる若者も調べている。友人に充実感を覚える人が増えるにつれ、当然ながらそこに悩みを感じる若者は減っていた。満足度が上昇してきたのだから、そこに問題を感じる人が減ったのは当然だろう。ところが、2000年代に入ると、その傾向が反転し、再び増えはじめるのである。

同じような傾向は、彼らの家族関係に対する態度も見受けられる。家族といえるときに充実感を覚える若者は、1970年代には約20%だったが、2000年代には約40%に増えてきた。しかし、それと同時に、そこに悩みや心配を感じる若者の割合も、1990年代までは減少していたのに、2000年代に入ると再び増加へと転じてくるのである。

この調査では、「悩みや心配」としか尋ねていないので、その中身までは分からない。しかし、人間関係に不満を覚える人の割合が増えたのでないことは確かだろう。充実感はずっと上昇し続けているからである。では、反転して増えはじめた「悩みや心配」とは何だろうか。それは、おそらく不安ではないだろうか。そう解釈すると、表面上は満足度の上昇と相反する現象のように見えて、じつは互いに矛盾するものではないことが見えてくる。

かつて制度的な枠組みによって人間関係がきつく縛られていた時代には、個々人によってその幅にあまり差異がなかった。しかし、既存の枠組みの拘束力が緩んでくると、いわゆる場を盛り上げる能力に長け、対人関係を器用にこなせる人物と、そういった社交術に疎く、体現関係が不得手な人物との間に、かつて以上の格差が生じやすくなる。良くも悪くも制度的な枠組みが人間関係を規定しなくなるからである。

人によって人間関係のあり方にあまり大きな格差がなければ、それは人物評価の物差しとして機能しない。しかし、人間関係が自由化し、そこに幅が出てくると、それが人物評価と直結しやすくなる。そこに個人的な能力や魅力が反映しているかのように感じられるようになるからである。こうして人間関係の多寡こそが人間としての価値を決めるかのような感覚が、若者たちの間に広がっていく。

自由でフラットになった人間関係は、一方でその満足度を上昇させるが、他方でその不安を掻き立てもする。かつてのように制度的な枠組みが関係を拘束しな

くなったということは、裏を返せば、制度的な枠組みが関係を保証してくれる基盤ではなくなり、それだけ自己責任の比重が高まったことも意味するからである。満足感の上昇と不安感の上昇は、一見するは矛盾しているように見えるが、じつは人間関係の自由化がもたらした帰結であり、表裏一体のものなのである。

●人間関係の規制緩和

自分が好まない相手との関係に無理に縛られることがないという事情は、当然ながら相手の側にもまた同様に当てはまる。関係が自由化すると、たとえ同じクラスの生徒でも、相手が自分と付きあってくれる保証はどこにもなくなるし、たとえ同じ部活の一員でも、相手が自分を助けてくれるとは限らなくなる。付きあう相手を勝手に選択できる自由は、その相手から自分が選択してもらえないかもしれないリスクとセットである。

自由とリスクはいわば表裏一体の関係にある。満足度の上昇とともに、いったん「悩みや心配」の対象ではなくなっていた人間関係が、いま再び「悩みや心配」の対象と感じられるようになったのは、このような事情によるところが大きい。

もっとも、人間関係に充実感を覚える若者が増えはじめたのは1970年代からだった。それに対して、不安を覚える若者が増えはじめるのは2000年辺りからである。自由とリスクがセットなら、両者は同時に進行していなければならないはずである。では、このズレはいったい何処から生じているのだろうか。ここで考えてみたいのは、自由と自己責任を強調する米国発祥の新自由主義な考え方が、わが国ではこの時期から人びとの意識に深く浸透し、人間関係に対する態度を大きく変えていったという点である。

東京都監察医務院の調査によると、東京都での孤立死の発生件数は、1980年代以降、右肩上がりで増えてきた。家族に看取られずに亡くなる人の増加は、まさに伝統的な共同体の揺らぎを象徴しているといえるだろう。ところで、とくに男性でその件数が急激に増えはじめるのが、やはり2000年辺りからなのである。

同調査によれば、孤立死率と失業率の間には密接な相関が見られる。その観点から改めて当時を振り返ってみると、自由と自己責任を強調する新自由主義が、私たち日本人の意識へ深く浸透していったのが、じつはこの時期だったことに気づく。この頃、人間関係のリスク化が急激に進んだ背景には、社会構造上の大きな変動があったのである。

新自由主義がわが国に本格に導入されたのがいつ頃かについては、おそらく論者によって意見の分かれるところだろう。従来の法制度に新自由主義な変更が多く加えられるようになるのは、2001年に成立した小泉内閣からである。しかし、それに先立って橋本内閣や細川内閣に新自由主義の嚆矢をみる論者もいるだろう。あるいは国鉄の民営化を行なった1980年代の中曽根内閣まで源流を遡ることもできるかもしれない。

しかし、1980年代の日本社会は、すでに高度成長の時代を終えていたとはいえ、

まだ安定成長期の段階にあり、気分的にも成長路線の道中にあった。その空気が徐々に変わっていくのは、1990年にバブルが弾けてからである。そして、2000年を越えた辺りから、もはや日本社会のパイは拡大しえないのだと身をもって実感されるようになるのである。

日本生産性本部の新入社員調査によれば、「今の会社に一生勤めたい」と「転職してもよい」の傾向は、2000年を境に反転する。それまで減少していた前者が増えはじめ、増加していた後者が減りはじめるのである。そして2006年には、双方の割合がついに逆転する。また、コミユカという言葉が様々な場面で頻繁に用いられるようになるのもこの頃からである。人間関係への関心が急激に高まるのである。

同じ新自由主義であっても、このように拡張する社会と飽和した社会とでは、社会の流動化が人間関係に与える影響は大きく違う。社会が成長し、全体のパイが拡大していると感じられるとき、社会の流動化は、人びとの眼差しを外向きにさせる。新たなチャンスを求め、ともかくフロンティアへ打って出ようとする。人間関係においても新たな出会いを求めようとする。そのほうが落ちこぼれるリスクが少ないからである。

しかし、社会がすでに成長をやめ、全体のパイが限られていると感じられるとき、社会の流動化は、人びとの眼差しを内向きにさせる。現状の既得権益を守り、限られたパイの分け前を少しでも安全に確保しようとする。人間関係においても既存の組織にしがみつこうとする。そのほうが落ちこぼれるリスクが少なくてすむからである。

このような規制緩和の波は、たんに経済市場や雇用の局面だけで進んできたものではない。それを超えて、一般の人間関係のあり方にも大きな影響を与えてきた。社会の流動化が進み、制度的な枠組みが強制力を失ってくると、付き合いが自由になる一方で、かつてのような安定性をそこに期待することも難しくなる。そのため、人間関係がリスクと看做されるようになっていく。

その流動化の波は親子関係にも大きな影響を与える。ベネッセが2005年に行なった調査によれば、母親が子どもに期待することの上位3つは「友人を大切にする」「他人に迷惑をかけない」「家族を大切にする」である。複数回答の設問で、いずれも7～8割と圧倒的に高い比率になっている。他方、4位以下の「仕事を能力を発揮する」「周りから尊敬される」「考えを貫き通す」などは2割以下にすぎない。今日の母親たちは、変革を求めて外部に打って出る能力ではなく、既存の人間関係をうまく生き抜く能力を、子どもたちに期待している。いうまでもなく、その期待は子どもの意識にも投影されていく。

2. 生きづらさを歌うボーカロイド

●一人でいられない時代

1960年代初頭に地方から都会へ出てきた若者に対して行なわれた調査によると、当時の悩みの第1位は、友人や仲間が見つからないことではなく、独りになれる時間や空間がないことだった。彼らは、現在のように濃密な人間関係を希求していたのではなく、むしろ逆に、制度に縛られた濃密な人間関係を嫌悪していた。だから、独りでも生きていける人間は、「一匹狼」という言葉に象徴されていたように憧れの的だった。集団のしがらみからの解放を意味していたからである。

その後も1980年代頃まではその傾向が続く。当時の若者たちは、伝統的な枠組に埋め込まれた人間関係を鬱陶しいものと感じ、そこから解放されたいと夢見ていた。その消費活動も多くが人間関係を嫌悪する心性に支えられたものだった。自分1人で過ごせる部屋を持ち、そこで自分の好きなビデオやオーディオを楽しみ、外出時は自家用車に乗りたい。街角を歩くときも、ヘッドホンを装着して外界をシャットアウトしたい。いずれも人間関係を鬱陶しいものと感じ、そこから逃れたいと願う心性から生まれた消費行動だった。

もちろん、ときには親しい仲間や恋人と一緒に時間や空間を楽しみたいという欲求もあっただろう。しかし、それとても不本意で不自由な人間関係から解放され、自分が望む特定の相手だけと時空間を共有したかったのだとすれば、大きくは関係嫌悪の心性に支えられていたといつてよい。その特定の相手とは、自我の延長と考えても差し支えないからである。ところが現在では、若者が1人になれる環境はすでに最初から用意されている。それどころか2000年代に入って社会の流動化が過剰に進み、今度は逆に無縁化が不安の源泉となってきた。

現在の日本では、たとえば30歳を過ぎて独身でも、世間から白い目で見られることは少なくなった。また、コンビニエンス・ストアなどが普及して、単身者でも生活しやすい社会になった。しかし、そうやって人間関係の自由度が高い社会になったからこそ、つねに誰かとつながっていなければ安心できなくなっている。そして、もしそれができないと、自分は価値のない人間だと周囲から見られはしないかと他者の視線に怯え、また自身でも、自分は価値のない人間ではないかと不安に慄くようになっていく。その意味で、じつは今日は1人で生きていくことがかつて以上に困難な時代である。

いまや1人でいる人間は、かつてのように恰好よい人間と賞賛されなくなり、むしろ逆に「独りぼっち」と蔑まれ、痛い人と侮蔑される。1人になることは関係からの解放ではなく、むしろ疎外を意味するからである。自身が向ける眼差しだけでなく、他者から注がれる眼差しにも怯え、少しでも安定した人間関係を確保しようと絶えず駆り立てられていくのである。

●学校という閉鎖空間

このような事情は、とくに学齢期の子どもの世界において熾烈である。なぜなら、彼らが生活時間の大半を過ごす学校では、お互いに閉鎖的な空間のなかに置かれ、付きあえる相手の範囲も限定されているからである。そのため、友だちという人的資源をめぐってゼロサムの奪い合いが生じ、一般社会よりも関係の格差が異様に目立ちやすくなる。付き合いが苦手な子どもにとっては、周囲からの孤立感がさらに募っていきやすくなる。

子どもたちの世界でも、意識の面では確実に人間関係の自由化が進んでいる。彼らも大人と同じくこの社会の空気を吸っているのだから、それは当然のことだろう。しかし、学校のクラス制度は旧態依然で、相変わらず人間関係が狭く固定された閉鎖的な空間のままである。この両者のギャップが、人間関係のリスク化と格差化を一般社会以上に際立たせる結果を招いている。

しかも昨今は、学校生活において勉学の占める比重が大幅に下がっており、友人関係を営むことが通学の主たる目的と化している。そのため、友だちとの関係にいったん齟くと、それが不登校の引き金となってしまうことも多い。じっさい、近年、中学生が不登校になるきっかけの第1位は「友人関係の問題」であり、第2位の「学業の不振」の倍近くを占めている。通学の主たる目的が勉学など別のところにあれば、人間関係はそれだけ相対的に軽くなるが、学校へ行く明確な目的が人間関係以外にないので、それが非常に大きなプレッシャーとなってくるのである。

このように、社会の流動性の高まりによって人間関係の自由化も進んだ結果、今日では、人間関係に否応なく縛られることへの「不満」に起因した「悩み」は大幅に減少してきた。しかし、それに代わって、今度は不安定な関係の寄る辺なさへの「不安」に起因した「心配」が大幅に増加している。思春期を迎えた年齢の人びとには、とりわけその傾向が強い。彼らは、人生のステージにおいて単に多感な季節を生きているというだけでなく、そもそもこの社会の劇的な変化にうまく適応しなければ、これからの時代を生き抜いていけないことを肌身で感じとっているからである。そして、今日の学校空間は、その感覚をさらに研ぎ澄ます環境になっているのである。

●初音ミクという代弁者

このように今日の社会では、人間関係の自由化が進んだが故にそれが高いリスクを孕むようになり、人びとの不安感を刺激するようになった。とりわけ学校という閉鎖空間にいる若者にとっては、その感覚が増長させられやすい。次の歌詞には、このような人間関係に対するアンビバレンスが巧みに描かれている。

誰かと違う事が怖くて／作り笑顔の下に潜んでいる Liar／誰かと同じ事が嫌で／頷きの奥に見え隠れしてる Liar／孤独が怖くて被る仮面／どうし

ようもない嘘つきを笑えよ／どうしようもない偽善者を笑えよ／誰かこの偽善者を消してよ／僕を消してよ！／誰かと同じように振る舞って／誰かと同じ気持ちに浸るのはもう嫌

誰かの噂話が気になって／夜も眠れない怖がりはおもう嫌／孤独が怖くて誰かといたくて／卑しい汚い僕になった／もう疲れたよ／どうしようもないよ／もう消えたいよ／僕を消してよ／どうしようもない嘘つきが歌うよ／どうしようもない偽善者を歌うよ／どうしようもない偽善者の偽善が／僕を消していく

「偽善正義」作詞 偽善者P／歌 初音ミク

これは、いま若者に人気のボーカロイド、初音ミクが歌う詞の一部である。ボーカロイドとはボカールとアンドロイドの合成語で、パソコンに入力された歌詞とメロディの指示にしたがって、合成された人工音声に歌わせることのできるアプリケーションソフトを総称したものである。

初音ミクは、札幌市にあるコンピュータ・ソフトウェア会社、クリプトン・フューチャー・メディアが手がけた製品で、ヤマハが開発した音声合成システムに、美少女のキャラクターを付けて発売したところ、この種のソフトとしては空前の大ヒットとなった。いまや「彼女」のファンは、コンピュータ・ソフトに関心をもつ層を超え、一般の若者にも広がっている。

かつては、歌が上手だったり、楽器を弾けたりなど、それなりの能力がなければ、自らの思いを公の場で表現することなど出来なかった。しかし、ボーカロイドの登場によって、そのハードルは一気に下がった。パソコンさえ持っていれば、いまや誰でも簡単に自らの思いを歌に託し、公の場で表現できるようになった。

そして、このようなボーカロイドの魅力を端的に示しているのが、歌詞をモチーフにしたイラストやアニメを作成し、その動画と歌を併せてネットに公開するという新しいタイプの創作行為なのである。「ニコニコ動画」などの動画投稿サイトには、そのような作品が数多く氾濫している。この現象は、ボーカロイドが単なる音声合成ソフトとしてではなく、自分の思いを大勢に伝えることのできる重要なコミュニケーション手段として使われるようになったことを示している。

もちろん、ボーカロイドが歌う詞には、さまざまなジャンルのものがある。恋愛ものや友情ものもあれば、部活をテーマにしたものもある。しかし、それらと比しても劣らないほど大きなジャンルとなっているのが、ここで紹介したような「生きづらさ」系の曲なのである。そこには、いまを生きる若者たちの切実な思いがストレートに表現されている。

たしかに若者の代弁者といわれる歌手は昔から存在してきたのも事実である。少し前では尾崎豊や浜崎あゆみなどがそうだったし、現在では西野カナなどもそうだろう。しかし、自らが詞を書いているとはいえ、彼らはいずれもプロのタレントである。素人であるファンたちは、その作品の一方的な受け手にすぎなかつ

た。

それに対して、ボーカロイドの世界では、そのファンたちは他の投稿者の作品の受け手であると同時に、自らもまた容易に表現側に立つことができる。互いが互いの作品の受け手であると同時に、またその作り手にもなる。ここに至って、表現者とファンとの関係は、AKB以上にフラット化したのである。

●複雑化する人間関係

近年、若者たちの間でコミュニケーションに対する関心が非常に高まっているのは以上のような理由によるところが大きい。ところが、ここには一つの隘路がある。今日では、人間関係の重要性がかつて以上に高まっているのに、それを円滑に営むことも、またかつて以上に難しくなっているのである。価値観が多元化していくなかで、お互いの考えを理解しあうことも、またかつて以上に難しくなるからである。お互いに依って立つ地平がまったく異なるようになるからである。

古来から日本人は空気を読むのが得意で、「あうん」の呼吸でも話が通じるといわれてきた。それが可能だったのはお互いの同質性が高く、同じ地平に立って話を交わすことが容易だったからである。しかし現在では、その前提が崩れ、他者との意思疎通が難しくなっている。価値観の多元化が進んだことで、いわばお互いに異文化状況に置かれるようになったからである。したがって、人間関係がフラット化したからといって、その相手からの評価がいつも予想どおりのものであるという保証はどこにもない。

さらに、先ほど指摘したように教師など大人たちとの関係がフラット化したことも、それに追い打ちをかける。若者にとって大人という共通の敵が消えたことで、皮肉にも同じ世代の内部での価値観の違いが際立つようになったのである。大人たちの評価に重みを感じず、自分の価値観との相違を気にかけなくなった分だけ、友だちとのわずかな違いにも目が行くようになり、その差異が相対的に目立つようになったのである。

次のボーカロイド曲の歌詞は、このような今日の人間関係の「分かりあえない感」を見事に表わしている。この詞を歌っているのは、初音ミクではなく、重音テトというボーカロイドである。初音ミクの大ヒットを受けて、類似のアプリがその後次々と開発されてきたが、なかには商品ですらなく、ボーカロイドのファンたちが自らの手で共同開発したアプリも存在する。この重音テトもそのような自己開発のアプリの1つである。このことからもうかがい知れるように、いまやボーカロイドは、若者たちが自分の思いを託して歌わせることのできる魅力的なツールとなっている。

手紙が届いた／昨日飛び降りた人から／顔も声もわからない／ただのとなりのクラスの男の子／手紙開いてすぐ目に飛び込んできた言葉／天国にいる人からの想い／屋上さびついた手すりから／見えるの殺風景／無価値な夜景

を見ながら／あなたは最期に何を想ったの？

夜に学校忍び込んで／わたし屋上を目指すの／あなたが最期に見た景色／眺めたら何かわかるかも／ついに、目にした風景／だけどなんにも浮かんでこない／寂れた夜景を見てわかった／わたしとあなたは永遠に／悲しいくらい他人なんだ／強風吹かれながら黒髪／見つめる殺風景／あなたと同じ場所に立っても／わたしは上手く悲しめない

涙こらえて深呼吸／視線が上がって空が見えた／私の頭上には見える／星空の情景／最期にあなたが見た風景が／こんな景色ならうれしいな／強風吹かれながらわたし／考える現在系／最期に見たのがこの空だと／自分勝手に願ってる

「ハーゲングッツ以下の殺風景」作詞 背脂部／歌 重音テト

今日の若者たちが感じる生きづらさの一つがここにある。友だち関係の重要さはかつて以上に高まっているのに、それを営むことはかつて以上に難しくなっている。だから、過剰な不安をつねに抱え込むようになっているのである。

このような点から見たとき、昨年のAKB総選挙の結末は非常に示唆的である。大島と前田の二人が首位を争っていたこれまでの総選挙では、それでもまだ結末が企画側のプロたちの想定内に収まっていた。ファンたちも、どちらかが首位に立つのだらうと予想し、現実になんとおりになっていた。ところが、今回の総選挙では「まさか！」の結末だったのである。

昨年のAKB総選挙の開票イベントの生中継では、指原が首位に指名されたとき、啞然とする関係者たちの姿が映し出された。秋元も、速報の段階で彼女の首位が報じられた際に「校内マラソン大会で一周目だけは全力で走るみたいな」などと形容していたから、その最終結果についてはさすがに想定外だったようである。いや、開票会場の大きなどよめきぶりは、ファンたち自身にとってもそうだったことを物語っている。

これを今日の学校の隠喩として再びとらえ直すなら、クラスのなかで誰が人気者になるか、その基準はもはや教師の想定を超えたところにあるということである。それどころか、子どもたち自身ですら予想がつかなくなっているということである。それぞれの思いの最大公約数がどこに着地するかは、最後にふたを開けてみるまで誰にもわからない。裏を返せば、誰がいじりやいじめの対象となるかも、そのときになってみるまでまったくわからない事態になっているということなのである。

タレントである指原は、いじられ役に徹することでグループ内での自分のポジションを不動のものにし、その存在感を高めることができた。しかし学校の教室では、いじられ役がいつ何時いじめの対象へ変質するか分らない。ファン同士がお互いの関係を盛り上げるためのネタとして指原を利用したように、友だち同士がお互いの関係を盛り上げるためのネタとして特定の子をいじっているにすぎ

ないからである。

クラスでの人気者といじめの対象とは、いまや紙一重の存在である。だから、学校では誰もが自分だけ突出することを避けようとする。ともかく目立つことはフラットな人間関係を傷つける危険な行為なのである。いったい教室のどこに人間関係の地雷が埋まっているのか、いつそれを踏んでしまうのか、クラスメイトの誰にも分からない状況に置かれているのが今日の学校である。

3. コミュカを偏重する社会の到来

●通貨としてのコミュカ

ところで、AKBのメンバーには他にも個性の豊かな少女たちが大勢いるのに、指原莉乃が第1位になった理由は何だろうか。じつは、HKTへ移籍後の彼女の活動をよく知るごく一部のファンにとっては、彼女のトップ当選は予想された結果だったともいう。もとより彼女は、その独特のキャラを活かしてお笑い番組にも頻繁に出演し、芸人を相手に巧みな話術を披露していたが、HKTへ移籍後は、それに加えて周囲の仲間たちを盛り立てる気配りの絶妙さも見せ、その姿がファンから高く評価されていたからである。

指原は、ファンからいわゆるコミュカの高いタレントと受けとめられ、それが選挙でも最大の武器となったのである。価値観の多様化とは、ものの見方や考え方が様々に併存し、それらの評価がヨコ並びになることである。しかし、彼女のトップ当選は、そんな中でもコミュカだけは特権的な評価の地位にあることを示している。

従来、日本人は空気を読むのが得意で、あうんの呼吸で意思の疎通がはかれるといわれてきた。島国であるため、お互いの同質性が高かったからである。しかし、本論の冒頭で記したように、今日のように価値観の多様化した世界では、互いに異なったその価値観を調整しあうために、高いコミュカが必要とされるようになってくる。

また、様々な価値観が併存する環境下では、各々の価値評価について共通の見解が存在しないため、コミュカだけが人びとの間で唯一共通の評価基準として残ることになる。数多くの価値観が錯綜する現代社会では、すべての価値項目の内容を見通すことは不可能だが、互いのコミュニケーションをつうじて獲得された説得力の強さによって、各々の価値項目の間接的な評価が行なわれるのである。

そのため今日では、高いコミュカを備えた人物こそが、魅力的で価値ある人間であると看做されやすくなっている。また、そういう人物でないと、幸せな人生を送ることができないとも考えられるようになっていく。

近年、若者たちが他者を蔑視したり嘲笑したり、あるいは自分をわざと卑下してみせたりするとき、盛んに使うようになった言葉がある。コミュニケーション障害を略した「コミュ障」という言葉である。これは、人間としての魅力を測る物

差しとして、コミュ力が必要な比重を占めるようになったことを示している。コミュ力に対する期待値が儼ければ高いほど、互いに現実の姿とのギャップは広がり、そこに強い欠落感を覚えるようになるからである。

このように、今日のコミュ力は、市場においてどんな商品とも交換しうる貨幣と同等の地位を、人間関係において占めるようになってきている。貨幣を求めるがごとく、コミュ力を求めているのである。実際、企業が新卒採用時に学生に求める能力も、ここ数年はコミュ力が第1位である。若者たちに高度なコミュニケーション能力が要求され、その感性が高まっていくのも当然だろう。指原のトップ当選もその表われの1つだったのである。

●シンボル化による縮減

しかし、だからといって、そのように高度なコミュ力は、そう一朝一夕に修得できるものではない。学校での教科学習とは違って、ひたすら地道に努力したからといって必ずしも身につくものではない。なぜなら、コミュニケーションほどその評価が他者の反応に依存するものはないからである。

コミュニケーションとは、その原理的な性質からして、けっして自分の内部で完結するものではなく、つねに他者との関係の総体である。コミュ力とは、じつは相手との関係しだいで高くも低くもなりうるものである。それは、じつは貨幣のように個人が独自に持ちあわせているものではなく、すなわち個人に内在する能力などではなく、相手との関係の産物なのである。

しかし、裏を返せば、個人の努力ではどうにもならないからこそ、それは強い拘束力を持つともいえる。じっさい、世界価値観調査の結果によると、2000年以降の日本では、人生を決めるのは勤勉よりも運やコネだと考える人びとが激増している。とりわけ今日の若年層では、他の年齢層よりも相対的に人間関係を重視する傾向が顕著であり、それだけコミュ力に対する期待値も高い。このとき、コミュニケーション・ツールとしてのネットは、この隘路を乗り越える手段として大いに活躍することになる。

今日の若者たちは、お互いにキャラを立て、それを演じあうことで、コミュニケーション環境の高度化にともなう隘路を乗り越えようとしている。キャラは、ハローキティやミッフィーのように最小限の線で描かれた単純な造形である。それは単純明瞭であるがゆえに、私たちに強い印象を与え、全体像の把握を容易にしてくれる。生身の人間の場合も同様で、あえて人格の多面性を削ぎ落とし、最小限の要素だけを平板化して示すことで、お互いの理解は容易なものになる。

また、時間の経過とともに成長していかないのもキャラの特徴である。ハローキティやミッフィーに至ってはその表情ですら固定化され、まったく変化しない。物語から派生したキャラも、純粹にキャラとして確立されるにつれ、もとの物語に依存しない独自の実在感を獲得するようになる。人間の場合も同様で、初期設定された単純なイメージで人格を固定化してやれば、お互いの反応の予想がしや

すくなり、人間関係の見通しもよくなる。個別の文脈を考慮しないで済むからである。

このように、キャラは、複雑化した人間関係に安定した枠組みを与え、「あうん」の呼吸での関係を再び可能にしてくれる。人間関係の先行きが不透明化し、不確実性が増しているなかで、それでも人間関係を破綻させることなく、滑らかに運営していくための対人技法として役立っている。お互いに価値観を異にした人間どうしが、それでもコミュニケーションをスムーズに回していくためのシンボル操作として、人間関係を規定してきた従来の制度的な枠組みや共通の価値観の代替機能を果たしているのである。

そして、ネットの世界では、アバターと呼ばれる分身がしばしば置かれるように、シンボル操作が容易に行なわれやすいため、人物のキャラ化も促進されやすい。意図された特定の情報だけを送受信でき、一面的な人格イメージを作りやすいからである。日常の雑多な情報を切り捨てることで、イメージを純化させやすいのである。単純化されたキャラにとって、多種多様な情報はかえってノイズになるが、ネット・コミュニケーションにおいては、そのノイズのカットが容易なのである。

ネット・コミュニケーションにおいては、相手の表情や仕草、声色といった言葉以外のさまざまな情報が抜け落ちてしまうので、双方のあいだに誤解が生じやすく、フレーミング（炎上）と呼ばれる衝突が起きやすいと指摘されてきた。しかし裏を返せば、情報量も少なく、相手の反応も読みとりにくいゆえに、さほど高度なコミュニケーション・テクニックを駆使しなくても、お互いの相違点を簡単にぼかし、双方のあいだに合わせ鏡のような関係を築くことが容易だともいえる。そこでは人物像をステレオ・タイプ化させやすいのである。

●失墜する社会的権威

ところで、AKB総選挙の特徴は、ファンからの投票だけで次回発売するCDの選抜メンバーが決する仕組みになっている点にあった。それまでは、芸能のプロたちが歌唱力や表現力などを総合的に見定めて決定することが普通だった。それが、タレントのプロモーションの行方を大きく左右していた。芸能界で成功するためには、まずはプロに目を留めてもらうことが、何より必須の条件だった。

ところが、AKB総選挙では、そのようなプロの視点による評価をいっさい設けていない。そういった玄人の評価は、判断のプロセスがファンから見えないし、そもそもそこにファンの意見が反映されにくいからである。あくまでファンの評価だけで運命が左右されるところに、AKB総選挙の新しさがある。

一昨年のAKB総選挙で第1位に選ばれた前田敦子は、ある新聞のインタビュー記事でこう語っている。「プロデューサーにセンターで歌えと言われても、どうして自分なんだろうと不安があった。でもファンに選んでもらって、ここにいていいんだと思えました」。アイドルとしての自分を評価するに当たって、プロ

デューサーの評価だけでは自信をもてない。ファンから評価されてはじめて安心できた。そう吐露しているのである。

彼女が言及するプロデューサーとは、冒頭で触れた秋元康のことである。AKBを国民的アイドルグループへと育て上げた秋元は、いまや世界を股にかけて活躍する名プロデューサーであり、芸能界に不動の地位を築いた人物である。とりわけAKBのメンバーにとっては、神様のような存在である。しかし、その彼から与えられた評価でも、自信の絶対的な根拠にはなりえず、不安を覚えてしまう。彼女はそう語っているのである。

では、この状況を現在の学校に置き換えて考えてみたらどうだろうか。実際、AKBのメンバーたちは秋元を先生と呼んでいるし、その芸能活動もしばしば部活に例えられるから、さほど唐突なことではないだろう。

すると、学校の教師からの肯定的な評価が、今日の生徒にとっては絶対的な自信の根拠となりえなくなっていることに気づく。裏を返せば、その否定的な評価も、絶対的な反発の対象となりえなくなっているのである。教師は教育のプロであるが、その言動の重みが、かつてよりも大幅に失われているからである。先述したように、学校とは異なった価値観が社会にはいくらかでも存在することを、今日の生徒はすでによく知っているからである。彼らの眼差しは、あまりにも多種多様になったのである。

今日の生徒にとって、もはや学校の教師も、あるいは親ですらも、人生の指針を与えてくれる存在ではない。その教えを信じてさえいれば、人生の可能性が開けるなどと素朴には思えない。価値観の多様化した社会では、自分の人生の羅針盤は自分で探していかななくてはならない。

しかし、それは非常な重荷でもあるし、大きな不安の種でもある。だから、多様な価値観を示す周囲の人たちからの評価を自らの拠り所にしたいと願う。多種多様な価値観を持ったファンの評価の最大公約数である総選挙の結果が前田の自信となったように、クラスメイトからの評価が圧倒的な重さをもつようになっているのである。

●友人関係という羅針盤

制度的な枠組みの拘束力を弱め、人間関係を流動化させたのは、価値観の多様化という社会状況だった。その結果、現在の日本では、かつてより多様な生き方が積極的に認められるようになり、人生の選択肢も広がってきた。先ほど触れた新自由主義は、その流れを加速させたにすぎない。しかし、それは同時に、かつてのように安定した人生の羅針盤が見つかりにくくなったことも意味している。

明確な評価の物差しが社会に存在していた時代は、そして学校の教師がそれを体現しえた時代は、自分の内面に取り込んで自己評価の拠り所とするにせよ、反発を示して攻撃の矛先を向けるにせよ、いずれにしてもそれを標準器として利用することで、自己確認の基盤を確保することが容易だった。たとえ自分の信念に

従っているつもりの者でも、その信念の根拠は自身の単なる思い込みにあったわけではなく、社会的な客観性を担保されていた。だからそれは、時々自分の氣分に左右されることなく、つねに一定の方向を指し示す人生の羅針盤となりえたのである。

このように、安定した人生の羅針盤が存在しえた時代には、人はそれを判断の拠り所にする事で、たとえ所属する集団の人間関係に強く縛られていたにせよ、そこから受ける評価を過剰に気にしなくても済んでいた。自分が進んでいる方向には普遍的な正しさがあると思えたので、たとえ今は周囲に理解されなくても、いずれは分かってもらえるはずだと期待をかけることができたのである。

ところが、今日のように価値観が多様化してくると、自分がどんな選択肢を選んでも、それを選んだことに安定した根拠を見出せなくなってしまう。別の選択肢の可能性がいつまでも頭のなかに残り、いま選んだものが絶対とは思えなくなるのである。このとき人は、自分と同じ立場にいる他者の評価にすがること、自らの選択の客観性を確保しようとする。自らの判断が妥当であったことの根拠を、そこに求めようとするのである。

今日では、つねに場の空気を読んで、周囲からの評価を確認しなければ、いま自分が向かっている方向は本当にこれでよいのか確認を得ることが難しくなっている。自分が進むべき方向についての迷いを解消するため、周囲の反応を絶えず探り、それを自分の羅針盤とせざるをえない。その結果、他者による自己承認の比重が増し、それを得られるかどうかが不安の源泉となってくるのである。

今日の若者たちの間で、他者からの承認欲求が肥大している背景には、このような事情があると推察される。たとえば、フェイスブックやミクシィなどのSNSを駆使して絶えずつながりを保持しようとし、ツイッターでフォロワーの数を過剰に気にかけるのも、おそらくそのためだろう。自分には承認を与えてくれる他者がいるだろうかと、そして、そんな他者に囲まれた価値ある人間だと周囲から見られているだろうかと、二重の意味で他者からの評価を気にかけるをえないのである。

このような状況下で、たまたま運よく学校や職場での人間関係に恵まれた若者たちは、その人的資源をけっして手放すまいと躍起になり、帰宅後もネットを介して互いにつながりつづけ、つねに相手の動向をうかがうようになっている。また、そういった人間関係に恵まれない若者たちは、ネットを駆使して代替の人間関係を得ようとし、そこでの反応を過剰に気にかけるようになっている。

リアルな人間関係に恵まれず、その代替をネットの世界に求める「ネットおたく」と呼ばれる人たちは、たしかに人間関係「から」疎外されていると形容されてもよいかもしれない。しかし、リアルな人間関係に恵まれ、その維持手段としてネットを駆使する「リア充」と呼ばれる人たちも、それ以外の選択肢を持ちえず、人間関係の煩わしさから自由になりえないという点において、いわば人間関係「へ」の疎外に悩まされているといえる。

いずれの若者たちも、人間関係の多寡こそが自分の価値を決めると思い込んでいる点では同じであり、孤立することに大きな不安を抱え込んでいる。そして、この不安を解消してくれるツールとして、そして裏を返せばその不安をさらに煽っていくツールとしても、ネット機器は強大な力を発揮している。ネットは、24時間の常時接続を可能にするだけでなく、対面状況のようなコミュニケーション能力を問わないツールだからである。

4. コミュ力至上主義がはらむ陥穽

●匿名化される人間関係

さて、このように見てくると、今日の若者たちの間で、先述したようにコミュ力への思い入れが強いのは、おそらくそれが他者から承認を得るための必須アイテムと看做されているからでもあるといえるだろう。そして、その能力への期待値の高さと現実の姿とのギャップを埋めるために、キャラ化というテクニックが駆使されている。

したがって、キャラとは、人間関係というジグソーパズルのピースのようなものである。個々のピースの輪郭は単純明瞭であるが、それぞれが独自の形をもち、お互いに異なっているため、他のピースとは取り替えがきかない。ピースが一つでも欠けると全体の構図は損なわれてしまうから、集団のなかに独自のピースとして収まっているかぎり、自分の居場所が脅かされることはまずない。その点から見れば、たしかにキャラとは、集団のなかに自分の居場所を確保するための工夫の1つである。

しかし、それぞれのピースの形が、全体の構図のなかに収まるようにあらかじめ定められているという点に着目するなら、もしまったく同じ輪郭のピースが他のどこかで見つければ、それは自分のピースと置き換えが可能ということでもある。現在の若者たちが、他人とキャラが重なってしまうことを「キャラかぶり」と称し、なるべく回避しようと細やかな神経を使うのはそのためである。自分と同じ輪郭のキャラの登場は、集団内での自分の居場所を危うくするからである。

あるいは逆に、いくら強い個性の持ち主であろうと、集団内であらかじめ配分されているキャラからはみ出すことも、また同様に忌避される。全体の構図のなかにうまく収まらないうと、やはり自分の居場所が危険にさらされるからである。各自が呈示するキャラは、あくまで予定調和の世界内で割り当てられたものでなければならない。このようにキャラの世界では、人間関係の安定感が確保されやすいのと裏腹に、そこに居るのが他ならぬ自分自身だという確信を抱きにくくなっていく。

このところ世間で盛んになっている婚活を例に考えてみよう。昨今の婚活の流行りはマッチング方式と呼ばれるものである。希望する相手の条件をあらかじめ列挙しておき、それらの一致度が高い者どうしでの出会いがセッティングされる。

できるだけ多くの人と出会うチャンスを増やすには効率のよいシステムであるが、特定の相手とじっくり向きあって関係を育んでいくことは難しい。出来合いの錠前に合った鍵を見つけるような感覚で、あらかじめ自分と適合するスペックを備えた相手を見つけようとするものだからである。

このシステムが想定しているのは、あらかじめ完成された予定調和の関係である。2人で成長しあいながら培っていく関係ではない。したがって、もしその活動がうまくいかないとするれば、その理由は条件どおりの相手がなかなか見つからないからというよりも、お互いにそこに単独性を見出しえないからだろう。「条件さえ合致するなら、この人の相手は自分でなくてもよかったかもしれない」という不安を払拭できないのである。

このように、ピースの形があらかじめ定まった世界では、自分の居場所が安全に確保されているように見えて、じつはその確証を得られない。同じ条件さえ整えば、別人でもよかった可能性がつねに付きまとう。予定調和の世界では、私たちは代替可能な存在となって、かけがえのなさから疎外されてしまうのである。

●代替不能性からの疎外

以上のような点からすれば、キャラには特別性はあっても単独性はないといえるだろう。どれほど個性的なキャラであろうと、それがキャラである以上、つねに匿名性をはらんでしまう。ここに、予定調和を重んじるキャラ的な人間関係の落とし穴がある。そしてその落とし穴は、キャラ化と親和性の高いネット上で顕在化しやすい。ネットが有している匿名性は、たしかにキャラ的な人間関係の維持を容易にしているが、他方で代替可能性への不安を呼び込みやすいのである。

近年、日本では、暴走した青年による無差別殺人事件が何件か相次いだ。そのなかでも多くの人がとの脳裏に強く焼きついているのは、おそらく東京の秋葉原で25歳の青年が17人を連続殺傷した事件だろう。彼は、ケータイを駆使して、理想的なキャラをネット上で演じることに汲々としていた。しかし、それがいくら目立つキャラだったとしても、そこに単独性は保証されなかった。そのため、自分に成りすました人物によるいたずらの書き込みによって、ネット上での自分の存在を打ち消され、自分のかけがえのなさから疎外されていった。

この青年は、日常の人間関係に対する不全感を埋め合わせるかのように、ネット上の他者に安定した関係を追い求めていた。しかし、結局はそこから疎外されることで、さらに孤立感を強めていく。そして、ついに「自分という人間の存在を認めよ」と叫び、自らの存在感を誇示するための凶行に走ってしまう。彼は、犯行に至る前に、「きょうも華麗に無視されています。皆さん、私の存在そのものを否定していますよね」とネット掲示板に呟いていた。犯行後に供述した「殺すのは誰でもよかった」という彼の言葉と重ね合わせてみると、彼の孤立感と絶望感の底深さが透けて見えてくるだろう。

予定調和の世界は、たしかに見通しもよく、落ち着きのよいものかもしれない。

しかし、そこにはあらかじめ想定された枠組みに収まりきらない多様性が存在しえない。だから、キャラの輪郭さえ合致するなら、ここに居るのは自分でなくてもよかったのかもしれないという不安が喚起されてくる。コンビニエンス・ストアやファスト・フードの店員が、店のマニュアルに従って動いてさえいれば、ここに居るのは自分でなくてもよかったのかもしれないという疎外感を抱きがちなものと同じで、自己の単独性がそこでは保証されえないのである。

次に掲げた歌詞は、「生きづらさ」系を好むボーカロイドのファンたちの間で高い評価を得ているヒット曲の1つである。ここには、以上のような代替可能性がもたらす存在論的な不安が見事に描かれている。

父さん母さん今までごめん／膝を震わせ親指しゃぶる／兄さん姉さんそれじゃあまたね／冴えない靴の踵潰した／見え張ったサイズで型紙を取る／何だっていいのさ代わりになれば／愛されたいと口を零した／もっと丈夫なハサミで／顔を切り取るのさ／全智全能の言葉をほら聞かせてよ／脳みそ以外もういらないと／ただ揺らしてよ／縫い目の隙間を埋めておくれ

皆さんさようなら／先生お元気で／高なった胸によだれが垂れる／正直者は何を見る？／正直者は馬鹿を見る！／これじゃまだ足りないよ／もっと大きなミシンで心貫くのさ／もう何も無いよ／引き剥がされて／糸屑の海へとこの細胞も／ボクいないよ／投げ捨てられて／帰る場所すら何処にも無いんだよ

存在証明／ウソだらけの体／こんなのボクじゃない！／縫い目は解けて引き千切れた／煮え立ったデイズで／命火を裁つ／誰だっていいのさ／代わりになれば

「東京テディベア」作詞 押入れP／歌 鏡音リン

先に掲げた2つのボーカロイドの歌も含めて、ここで改めて歌詞を読み直してみてほしい。非常に強烈な言葉が並んでいることに気づくだろう。日常の場面ではおそらく口にすることなど出来ないような言葉も多々見受けられる。おそらく、ボーカロイドに歌わせる場合、極端に強烈な言葉を用いなければ、そこに込められた作者の思いが聴き手に届きにくいからではないだろうか。

●高度化した関係の逆説

昨今のネット上には、若者たちが「歌い手さん」と呼ぶ人たちが大勢いる。プロのタレントの歌を自分自身で歌い、その姿を録画して動画サイトに投稿する素人の人たちである。「歌ってみた」というジャンルがそれに該当する。もともとボーカロイドは機械に歌わせるものであるため、息継ぎの間が考慮されることがない。そのため、言葉が弾丸のように続くものが多く、生身の人間が歌いこなすには難しい。しかし、それでも「歌い手さん」のなかにはボーカロイド曲を公開してい

る人も存在している。

ところが、そのような「歌い手さん」が公開している「生きづらさ」系のボーカロ曲は、あまりにも生々しすぎて聴くに耐えないというか、こちらが非常に辛くなってしまうものが多い。アプリならば、ただ無機質に言葉が連ねられていくだけであるが、生身の「歌い手さん」の場合には、どうしてもそこに情感が込められてしまうからである。逆にいえば、ボーカロイドに歌わせる場合には、むしろ極端に強烈な言葉を用いなければ、そこに込められた作者の思いが聴き手に届きにくいのだといえるだろう。

そうしてみると、自分の思いを伝えるためにボーカロ曲を紡ぐ若者たちが、非常に極端で強烈な言葉を使う傾向にあるのは、言葉を発する人工音声やそれを乗せるネット空間が、生身の声の世界とは違って平板で無機質なものであるという特性に由来しているともいえるだろう。肉声とは違ってそこには単独性がなく、代替可能性をはらんでしまうからなのである。だから、自分たちの思いを託すために、これほど強烈な言葉を使うのである。

ボーカロイドにかぎらず、今日の若者たちがネット上で強烈な言葉を使いがちなのは、おそらくそこまで極端に表現しないと代替可能性を打ち消すことができず、自分の思いが相手に伝わらないと感じているからだだろう。ネットいじめなどに見られる書き込みには、たしかに大人からすれば目を背けたくなるほど汚い言葉が並んでいる。しかし、それらは書き手の悪意の強さを物語っているというよりも、このようなネットとキャラの特性に由来している面が強いように思われる。

今日は、日々の人間関係を円滑に営んでいくためにもネットが駆使される時代である。元来、ネットとは、見知らぬ人びとが時空間の制約を超えてつながることを容易にした装置であるが、しかしそれと同時に、身近な仲間どうしが時空間の制約を超えてつながり続けることを容易にしてくれる面もあり、とりわけ昨今の若者たちの間では、後者の面で使われることが多くなっている。

ネットは、いつどこに居ても、手っ取り早く自分の思いを相手に届けることのできる装置である。しかし、その思いが届いたという実感を得ることがじつは難しく、だからこそ過剰に言葉を紡いでいかなければならない装置でもある。このところ若者たちの間で、スマートフォンの人気アプリの一つであるLINE上でのKS（既読スルー）がタブー視され、そのため「LINE疲れ」という言葉が広まっているのも、このような事情が背景にあるように思われる。

今日の高度化したコミュニケーション環境は、自らの「生きづらさ」を大勢へ向けて容易に表現しうる道を開き、若者たちの承認欲求を満たしてきた。その道具を手に入れたことで、それまでの狭い人間関係から解放され、「生きづらさ」から逃れられた若者たちも多く存在することだろう。しかし他方では、このような環境の広がりこそが、逆に人間関係への束縛をさらに増長し、新たな「生きづらさ」の根源の一つになってきた面もある。今日のようなコミュニケーション環境の広がりこそが、ボーカロイドの歌詞が語るような「生きづらさ」の背景の一

つとなっているともいえるのである。